

なような気がする。

そのうえ問題になることは、購入図書の数が増えることである。

	昭34 (昭35.3.31現在)	昭35 (昭36.3.31現在)	昭36 (昭37.3.10現在)
館内(個人貸出)用	2,218冊	2,636冊	2,220冊
館外(団体貸出)用	3,498冊	3,004冊	3,350冊
計	5,716冊	5,640冊	5,570冊
(予算)	(180万円)	(200万円)	(250万円)

予算の上では、昭和34年度が180万円、昭和35年度が200万円、昭和36年度が250万円、と上昇はしているけれども、図書の単価の値上り等があるため、年間増加冊数は殆ど全く同じであり、むしろ減少の傾向すら見られる。もし分館やブックモバイルや青少年巡回文庫の巡回場所を増加したら、館外(団体貸出)用図書の増加をはからなければならないという一面も看過するわけにはいかない。

団体貸出用の図書は、館内用として購入する基本図書よりも、いかにも多い感じを与えるが、予算の上での配分計画は下記のとおりであるから、単価はずっと安いわけである。いわゆる読みやすい本を購入して、読書層を増大しようというねらいである。読書する人員の増加をはかるわけであるが、これにばかり力を入れておると、県の唯一の貴重資料館としての使命を失ってしまう。

#### 図書購入費配分計画

	昭35	昭36	昭37
館内(個人貸出)用	110万円	140万円	170万円
うちわけ			
基本図書	100万円	110万円	140万円
一般図書	10万円	20万円	20万円
特殊資料	.....	5万円	
レコード	.....	5万円	10万円
館外(団体貸出)用	90万円	110万円	130万円
うちわけ			
分館	46万円	54万円	
青少年	18万円	24万円	
ブックモバイル	46万円	52万円	

⑤ 最後に、図書の購入状況と利用状況を対比して量か質かの問題にもう一度触れておきたい。

図書館としては、総記から文学にいたるまで充分考慮し、それほどアンバランスな購入をしているわけではないが、利用する側は全体の83%強までが文学作品であるという現実である。図書館にいても読みたい本がないなどといわれるのは、おそらく文学の領域ではないかと思われるが、これ以上文学ものを増やすことは可能だろうか。

#### 図書購入冊数と利用冊数の対比

(昭35の材料から)

	種類別購入比率	種類別利用率
0 総記	16%	1%
1 哲学	4%	2%
2 歴史	11%	3%
3 社会科学	22%	4%
4 自然科学	4%	1%
5 工学工業	7%	1%
6 産業	8%	2%
7 芸術	5%	2%
8 語学	2%	1%
9 文学	14%	83%
(児童図書)	7%	
計	100%	100%

## 2 図書館の仲間をふやす

### (1) 県公共図書館協会

昭和36年度から、二本松市、松川町の新たな加入を見、年度のまさに終らんとする今、会津坂下町の加入申込みを受けた。

会津若松市、郡山市、白河市、須賀川市、磐城市、内郷市のように、図書館と公民館がともにあるところでは、図書館に加入を願い、図書館をとおして公民館に御連絡を願っているが、図書館がないところでは、公民館に加入していただいている。将来は是非「主だった公民館」にも加入していただき、一方において全国的な図書館の動きを知っていただくとともに、他方において個々の公民館図書部では実現し得ない種々の事業を共同で行ない、互いに読書普及をはかっていきたいと願っている。